

---

# チェーンメール

乃依

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

チヨーンメール

### 【Zコード】

Z0077M

### 【作者名】

乃依

### 【あらすじ】

この話はフィクションです。

ぼくが主人公の話でまだ分かりませんが多分ホラーものになると思います。

チヨーンメールが現実に入つてくると言つ話です。



せじめつ・・・（前書き）

現実とは違いますので「理解を・・・・  
また誤字・脱字などその都度直していただきたいと思います。

## はじまり・・・

雨が降る日の事だった

その日の天気予報は晴れでぼくは傘を持っていなかったので走つて家まで帰つた。

家に帰つてもまだ雨はやまざ母と姉はまだ帰つてきていなかつた。母たちも傘を持つて出なかつただろうと

ぼくは駅まで迎えに行くと連絡を入れるためケータイを開いた。

「なにこれ？」

画面には知らないアドレスからメールがきていた。  
ぼくは興味に引かれメールを開いた。

そこには

「僕の妹は世田谷区で4年前放火にあつて死にました。

その犯人はまだ捕まつておらず僕は4年間犯人を探してます。

警察は取り合つてくれず、捜査も3週間で打ち切りになつたからです。

その情報集めにこの方法をとつています。

このメールを10人の人に回して下さい。

このメールはどこにあるかなど最新の技術で分かるようになつています。

10人に回さない人は犯人とみなされ殺しにいきます。

実際に2人殺しました。

これは本当にあつた話です

最後にもう一度。10人に回さない人は犯人とみなされ殺しにいきます。

僕は流行のチェーンメールだと思い、気にもしなかつたが、

次の日学校で凄く話題になつていて昨日来たチヨーンメールの話を思わず口にした。

その一言で皆が僕の周りに集まつてきて詳しく聞かせてなどを言われ最終的には

チヨーンメールを20人以上に送る話になつていた。

10人を上回る結果で、これでぼくは殺されないという安心感が生まれた気がした。

あんな迷信信じていた訳ではないのに。  
自分が自分じゃない気がした。

ぼくはその時大きな闇に足を踏み入れてるとは気づかなかつた  
気づいたのはもつともつと後のことで  
もう抜け出せないまでにきてからのことだった

## 第1話

ぼくはなぜかこないだ皆に回したチェーンメールが気になり内容が本当にあつたかどうか調べてみるとにしてみた。本当に少しの好奇心だけだった。ほんの少しの。。。

その日、学校帰りに近くの図書館により昔の新聞、インターネットを調べ帰った。

帰り道少しどキドキしていて回さなかつたら死んでいたかもしれないという恐怖心にあおられた。

まさか本当にあつた話なんて思つてもみなかつた。

「世田谷区で佐藤 優菜さん（12）出火で死亡。。。」

誰かが昔の未解決の事件をチェーンメールにしたとも考えたが、ぼくはもう少し冒険してみたかった。

次の日は土曜日で部活もなく休日だったので4年前の現場まで行つてみることにした。親には友達と遊んでくるとか適当に言つて本当のことは言わなかつた。

ぼくは刑事気分を満喫していた。

一様ぼくの中では  
「佐藤 優菜さん殺人事件」となつていた。

チェーンメール通り本当に殺人事件かどうか分からぬがとにかくぼくは普通すぎてぱつとしなかつた現実を少しでもいいから変えたかつたのかもしれない。

ぼくの家から現場の家があつた所までは電車で35分ぐらいのところで以外にも近かつた。

駅を降りて歩いて10分ぐらいで4年前家があつたと見られる場所についた。

4年前の跡地はそのままなのか草が伸びきつていてぼくの背丈ほどあつた。

隣の家に住んでるとみえるおばあさんが外に出て掃除をしているので話を聞いてみる事にした。

やはり内心は「聞き込み」という刑事気分だった。

話を聞いてみるとやはりドラマのように大きな情報は得られず、ぼくは少しがっくりきた。

ぼくはもう少し近所の人と話を聞いてみたい現場の家までもじつた。

するとぼくと同じぐらいの年の女の子が立っていたので何か知つてゐるかと思い、話しかけてみることにした。

「あのー」

彼女は振り向きぼくの目をじっとみてから

「なにか?」

と言つた。

彼女は髪が長く目がくちくちしててスタイルもよく、ぼくの好みにぴったりだつた。

今まで一目ぼれなどしたことがなかつたがこの時初めて一目ぼれをした。

彼女は可愛いといつより美人系で、声が透き通つていて少し寂しそうな目をしていた。

「あ、いえここに何か?」

「いえ、別に・・・・・」

少し間があいてから彼女の方から

「ではもう帰りますので」と言つてきた。

ぼくは彼女ともう少し話したかったが引き止める事さえ出来なかつた。

駅に行きキップを買い、家に帰つた。

姉は帰つてきており

「どこ行つてたの？」

と聞かれたので

「ん。友達の家」

とまた適当な嘘をついた。

なんとなく本当の事を言いにくかつた。

家に帰つても彼女の事を忘れる事は出来なかつた。

思い出しただけで胸がドキドキした。

次の日はいつもより早く目が覚めた  
雨で外に出る気分ではなかつた。

朝起きるとなぜか3件しかメールがきていなかつたので  
不思議に思つたぼくはいつも通りメールをチェックした。  
2通はただの宣伝でもう1通が問題だつた・・・

やつと見つけてくれた

「ん？」

すごく誰かに見られているような気持ちになつた。  
非科学的なことはあまり信じない僕でも  
あのチーンメール・・・・・  
と思つたりした。

でも何も僕は見つけていないし、ちゃんと10人以上にメールも回  
した。

何も怖がつたり、何かに怯えたりする必要はないと  
自分の心に言い聞かせ、また布団を被り深い眠りについた。

何時間眠つていたのだろうか

下からは何一つ音がしなかつた。

ぼくは重い体を起こし壁にそりながら階段を下りた。

家には誰もいなく置き書きがしてあつた。

起こしても起きないので放つておきました。

起きたら匂い飯チンして食べるのよ。

ぼくの家は人のプライベート一八あまり関わらないところのがモツ

トーで

あまり深くはぼくについて聞かないし  
勝手に部屋に入ってきたり、もちろん携帯も見たりはしない。  
小さい頃からそういう家庭だったの  
寂しいとか、かまつて欲しいとは思ったことがあまりない。  
たまに無関心すぎないか。  
とは思うことがあったが、もうすっかり慣れてしまった。

ご飯を食べ終わりふと窓の外を見ると

雨がすっかり止んでいた。

ずっと家にいるのも退屈なので、友達と遊ぼうと連絡を取ろうとした。

だが、誰一人連絡を取ることは出来なかつた。

メールや電話をするたんびにからず、ぼくは苛立つていた。

家を出ても、いく当てがなく公園でのんびりしていた。

（  
　　）  
　　「また・・・・・・」  
　　「ねえ、探して私のこと

どうやら寝てしまつたようだ・・・・

まだ家族は帰つてきておらず僕も出かけようと思い準備をした。

家を出ても、いく当てがなく公園でのんびりしていた。

また同じアドレスだつた。

僕は胸の辺りがズキズキいたんだ

「うつ

なんだこの感じ・・・・・  
苦しい・・・・・

ぼくはあの事件を調べなければという気持ちになった。  
そう思ひと気持ちがスッと楽になつた。  
さつきの苦しみが嘘のように消えていった。

跡地まではもう2回目だったので40分ぐらいで行けた。  
今回の目的は火事にあつた女の子のお墓に行く事だった。  
あたりはもう薄暗くなつてきていた。

その後以外にも早くお墓の場所を入手できたが  
時刻は6時回っていたのでお墓に行くのは今度にするとした。  
もうすっかり暗くなつていた。  
何だか怖くなつた僕は家へ急いだ・・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0077m/>

---

チーンメール

2010年10月9日21時09分発行